

【論 説】

# フェミニズムの歴史から考える アメリカ女子大学の行方 ——トランスジェンダー学生の受け入れをめぐる——

砂 田 恵理加

## 目 次

はじめに

1. 女子大学の誕生：歴史的考察
2. 第二波フェミニズムの中で：危機の時代
3. 女子大学の役割再考：第三の波
4. 「女子大学は誰のもの？」：  
トランスジェンダー女性の受け入れをめぐる  
おわりに

## はじめに

2015年5月2日、名門女子大学として知られるアメリカのスミス大学（Smith College）は、同校に入学を希望する受験生の対象に、「女性であるという自己認識を持つトランスジェンダーの人々を含める」という決定をしたことを大学関係者向けの電子メール、次いで大学のホームページで発表した<sup>1)</sup>。Seven Sistersとして知られるトップクラスの名門女子大学7校のひとつに数えられるスミスの決断は、全米で広く報じられ、おおむね好意的に受け止められている<sup>2)</sup>。

実は似たような決定をした有名女子大学はスミスが初めてではない。西海岸随一の伝統校ミルズ大学（Mills College）が2014年5月の早い段階で、次いでSeven Sistersの中ではマウント・ホリヨーク大学（Mount Holyoke College）の2014年9月を皮切りに、2015年に入ってからにはプリン・マー大

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

学（Bryn Mawr College）、ウェルズリー大学（Wellesley College）、バーナード大学（Barnard College）が、相次いで同様の決定を公にしている。それぞれの大学により基準は異なるが、トランスジェンダーの学生を女子大学に受け入れる流れは、2014年ごろから顕著になってきたために、これが新しいアメリカ社会の問題のように受け止められている。しかしその中で行われた議論は、「女性とは何か」「何が女性を女性たらしめているのか」「そもそも性別の定義は何なのか」という、女子大学が繰り返してきた、より根源的なジェンダーをめぐる問いであるようにも見える。

トランスジェンダーは、「性別越境者」あるいは「性別移行者」と訳すことができるが、日本でもそのままカタカナで使われることが多い。生物学的に男性か女性のどちらかに生まれたが、その性別に違和感を持ち、それとは異なる性を生きることを選んだ人々のことを指す。男性として生まれた人であれば女性として、女性であれば男性として生きる人々をトランスジェンダーと呼ぶことはもちろん、男性か女性かという二つの性別に割り振られることを拒否する人々もいる<sup>3)</sup>。また、着るものや髪形、立ち居振る舞いなどの選択により、自分の望む性を生きようとする人もあれば、ホルモン剤の投与や性転換手術など、生物学的な性別変更を望む人もいる<sup>4)</sup>。同性愛／異性愛といった性的嗜好（あるいはその不在）とは切り離して考えることが一般的である。一言でトランスジェンダーと言ってもそこには実に様々な人々が含まれており、英語では umbrella term、すなわち包括的用語と考えられている<sup>5)</sup>。

本稿では、こうしたトランスジェンダーの女性の受け入れを巡る議論が、女子大学の伝統の強いアメリカの歴史、特にフェミニズム史の中でどのような意義を持つのかを考察していく。アメリカ合衆国では女子大学は、第一波フェミニズムの流れに乗り19世紀なかばから20世紀初頭にかけて設立されていたが、1960年代なかばにはじまる第二波フェミニズムの中で、「時代遅れである」という批判を受けるようになる。70年代後半～80年代には保守化する社会の中でフェミニズムの熱気は失われていくが、90年代には新

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

しい形の運動が生まれたとされている。そうした中、20世紀末にはふたたび女子大学の意義が見直されるようになっていった。21世紀の現在における女子大学でのトランスジェンダーの受け入れを巡る議論は、こうした女性たちの運動の文脈の中で理解していく必要がある。

後述するように、個々の大学によって受け入れ基準に差はあるが、多くの女子大学はトランスジェンダー学生受け入れの方向に動いている。女性の役割とそこで必要とされる教育について議論を重ねてきた数々の女子大学が、相次いでトランスジェンダーの人々を受け入れる決定をしたことで、我々は現代社会における女性の枠組みの定義、そしてジェンダーそのものの意味の再考を求められている現実を目にすることとなった。固定化された既存の性の枠組みを攪乱する存在であるトランスジェンダーの人々を受け入れようとする女子大学の姿は、逆説的に第三派フェミニズムの潮流に乗っているようにも見える。

## 1. 女子大学の誕生：歴史的考察

アメリカ合衆国において、女子高等教育の必要性が議論されるようになったのは、主に19世紀に入ってからである。それ以前、植民地期には少数の例外を除いて、女子の教育は基本的な読み書きや家事、芸術や芸能など、いわば装飾的な教養教育を中心とするものだった<sup>6)</sup>。独立戦争後に、次世代の良き市民を育てる良き母を作らなければならないという、いわゆる「共和国の母」思想の下、初等・中等の公教育は女子にも門戸が開かれるが、やがてより高度な教育を目指す女子アカデミーやセミナリーが作られていく<sup>7)</sup>。こうした学校の教育レベルはまちまちで、装飾的な教養教育に終始するものもあった一方、やがて本格的な女子大学に発展していくものもあった。本稿冒頭で名を挙げたマウント・ホリヨークも、同名のセミナリーがその前身となっている。

本格的な女子大学が作られていくのは、奴隷制度をめぐる議論が一定の決

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

着をみた、南北戦争（1861—65年）後のことである。男女を問わず、奴隷制廃止論者たちの間ではもともと社会改革、改良運動に関心のある者が多く、女子教育推進派が多かった。南北戦争を経て人種問題の面で一応の成果を達成した後、彼ら・彼女らは女子高等教育の推進を次の争点とする傾向にあった。「ラディカル」すぎる女性参政権の要求に関しては当時のリベラルな人々の間でもその是非に関して意見の統一が難しかった中、女子教育の推進は比較的広範囲の層にアピールすることが可能だったのである。

後に Seven Sisters として知られるようになる有力女子学校も、こうした南北戦争後の流れの中で設立されていく。最も長い伝統を誇るのは、マサチューセッツ州のマウント・ホリヨークである。1837年という早い時期から、当時の男性大学に匹敵する高い教育を与えるセミナーとして知られ、学生に厳格なカリキュラムおよび生活スケジュールを課し、教育のある敬虔なクリスチャンの女性たちを世に送り出した。同校は他の女子大学の設立に遅れ、1888年に大学に昇格している。1861年に認可を受け、1865年にニューヨーク州に開校したヴァッサー大学（Vassar College）は、開校当初から名門男性大学と同じ教育水準を目指し、図書館や天体観測所などの充実した施設を備えた、名実ともに初めての本格的な女子大学であった。これらの女子大学に続き、ウェルズリー大学（1875年開校、マサチューセッツ州）、スミス大学（1875年開校、マサチューセッツ州）、プリン・マー大学（1885年開校、ペンシルヴァニア州）が設立された。また、既存の男性大学の coordinate college、つまり連携大学として、ハーヴァード大学の女性校であるラドクリフ大学（Radcliff College、マサチューセッツ州）が1879年に、コロンビア大学の女性校バーナード大学（ニューヨーク州）が1889年に作られている<sup>8)</sup>。設立当初から注目を浴びたこれらの大学は、現在でも有力なりベラルアーツ・カレッジとして全米で認知されている。

上記の例からも分かるように、初期の有力女子大学の中心となったのは東部地域であった。入植の歴史の古い東部に女性の入学を拒む伝統校が多かった一方、西部地域では南北戦争前後に相次いで設立された州立大学が、連邦

政府から補助を受けるために比較的早い時期から女性学生の受け入れを始め、制度的には女性の高等教育の機会が確保されていたからである<sup>9)</sup>。性道徳に厳格なヴィクトリア期のアメリカのジェンダー観の中で、別学の方が好ましいと考える風潮も無論強かったので、さまざまなレベルの女子大学が全米各地に存在してはいたが、名門男子校の、いわゆる Ivy League などと同等の教育水準を目標として設立された女子大学の所在地は、北東部に集中することとなった。

進学先が共学か女子大かにかかわらず、第一世代の女性学生たちには、大きな社会的関心が寄せられた。スミス大学を 1881 年に卒業したある女性は、「女性の大学生はあまりに珍しいものであったので、人目を気にせずにいることはほとんど不可能でした」と、自分の学生時代を振り返っている<sup>10)</sup>。彼女たちに注がれたのは、決して好意的な視線だけではなかった。そもそも 19 世紀のアメリカのジェンダー観の中では、女性が学問に適した能力を持っていると考える人は少数だったし、エドワード・クラーク（Edward H. Clarke）医師が 1873 年に出版し、ベストセラーとなった『教育における性——女子に対する公平な機会』（*Sex in Education; or, A Fair Chance for the Girls*）で主張した、高等教育は本来男性のみに適するもので、女性は熱心に勉強をして脳を使いすぎることによって生殖器に深刻な影響を与え健康を害し、将来的に不妊となり母としての役割を果たすことができなくなるという「学説」の影響は大きかった<sup>11)</sup>。男女が同等の教育を受けることは「神と人間がともに許さざる犯罪であり、生理学がこれに抗議し、経験がこれを嘆くものである」というクラークの主張が受け入れられる中、女子学生たちは自分たちが知的活動に適していることを身を持って示す必要があった<sup>12)</sup>。

クラークが本書の中で、高等教育が女性の健康を蝕んだ例として最も詳細に取り上げた“Miss D\_”がヴァッサーの学生であったことは、当時の有名女子大学が置かれた立場を端的に物語っていると言えよう<sup>13)</sup>。特に女性のために設立された高等教育機関である女子大学は、その存在証明のためにも学生教職員が一丸となってこうした「学説」を論破する必要があった。実際、

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

女子大学では詳細な健康診断が行われたという。スミス大学を1891年に卒業した学生は、ある日大学で、体重測定、身長測定に加え、ひざ下、腰下の長さ、頭、腰、肩、腕、足、首、手首、そして脚のまわりの測定、そして頭の長さ、足の大きさ、腕を広げたときの中指から中指までの長さの測定を受け、さらに肺活量や懸垂ができるかどうかなどの検査を受けたことを、驚きをもって手紙に書き残している<sup>14)</sup>。

こうした詳細な学生たちの身体の記録は、彼女たちの健康状態が優れていることを世に知らしめるための科学的根拠であった。学生自身が、自分がいかに元気に勉強をしているかということを家族に手紙で書き送っているのはもちろんのこと、スミスの初代学長であるシーリー（Laureus Clark Seelye）は、こうした健康診断で得られた数値をさまざまな機会公表し、女性の高等教育の善を世に訴えようとした<sup>15)</sup>。シーリー学長は1875年から1910年にわたりスミスの年次報告書を書いているが、学生の健康については最重要事項としてその最初のページで取り上げることが多かったという。1889年にはこの中で、「学生生活をおくるうちに、大部分の私たちの学生が肉体的にも精神的にも強くなっていくということは、まごうことない事実である」と結論付けている<sup>16)</sup>。

女性の学生の受け入れを拒む男性伝統校の前に、こうした大学と同等か、それ以上の高いレベルをめざし19世紀後半には女子大学が設立されていた。「女性はかやわく、連続した知的活動には耐えられない」という社会通念が幅を利かせる中、第一世代の女子大生、特に女性への高等教育に特化した女子大学で学んだ女性たちは、「女性は男性と同等の知的活動ができる脳と身体を持った存在である」ということを証明し、そのジェンダー役割を定義しなおしていく必要があった。こうした女子大生の先駆者たちは、「誰が女子大学で学べるのか」という昨今のトランスジェンダー学生受け入れの議論が始まるはるか前に、「女性は大学で学べるのか」という問いに、身をもって答えを出していったのである。トランスジェンダーの人々を学生として受け入れるかどうかの検討の中で問題となった、女性であること、女性と

しての身体を持つことの意味や定義は、女子大学萌芽期の19世紀からくりかえし議論されてきた懸案だったことは見逃してはならないだろう。

## 2. 第二波フェミニズムの中で：危機の時代

ヴァッサー大学で長年教えたニューカマーのまとめた統計によれば、女性の大学生総数の中で、女子大学に在籍する学生の割合は、少なくとも1870年までは共学のそれを上回っており、20世紀に入ってもなお30パーセントほどを占めていた<sup>17)</sup>。表1からも分かるように、男子にも女子にも門戸を開いている大学が全体の半数に満たなかった時代には、大学進学を目指す女性たちにとって、女子大学はひとつの大きな選択肢となり得たのである。

しかし20世紀に入ると、共学が大学全体の半数を超えるようになり、男子大学、女子大学とも別学の割合は下がっていく。女性が進学できる大学が増えたことは、女子大学にとってみれば相対的に志願者を減らし、共学に対する競争力を低下させていくことを意味していた。有力女子大学が、男性エリート校のIvy Leagueに匹敵するような教育資源の確保をめざしてSeven Sistersとして公式に結びつきを強めるに至ったのは1927年のことであったが、それもこうした風潮の中で各女子大学が危機感を募らせた結果であった<sup>18)</sup>。そのような女子大学の努力にもかかわらず、男女別学の全体での割合はその後減り続けた。表1の1957年から76年にかけての顕著な数字の変化からも分かるように、60年代～70年代前半には特にその傾向に拍車がかかった。1969年、制度的に最古の女子大学のヴァッサー大学が共学化することを決定したが、その前後の年代が別学の共学化のピークとなった。1960年には全米で176校あった女子大学が1970年には134校に、1975年に90校、80年に86校に減っているが、その大部分は共学化の道を選んでいる<sup>19)</sup>。

なぜこのように1960年代末～70年代前半にかけて女子大学が急激に数を減らしたのだろうか。ヴァッサー大学の学長でさえ、1967年の時点で、「世界中のどこにも、もう（男女）別学の有用性を強く主張できるような場所は

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

なくなってしまった」とコメントしたように、この時代、女子大学は時代錯誤の「アナクロニズム」であると考えられるようになった<sup>20)</sup>。同様に、エレン・ケンドルは有力女子大学の歴史を考察した1975年の著作の中で、女子大学のことを”Peculiar Institution,” すなわち「特異な制度」と呼んでいるが、これはかつての南部の奴隷制度という、負の遺産を指して使われる用語だった。ケンドルは、女子大学で培われた若い女性たちの自信や安心感、自由さは実は「4年間の幻想」であり、卒業式を迎えれば「突如として崩れ去ってしまう」ものであると指摘する。そして、女子大学は特殊な時代の、特殊な場所の産物であり、「独特で素晴らしい教育的冒険」ではあったけれども、もはや必要ではなく、成長をして現実世界に向かうためには別れを告げなければならないと結論づけている<sup>21)</sup>。

このような女子大学への辛辣な批判の背景を探るには、当時の女性解放運動が社会のあらゆる局面に及ぼした影響を理解しなければならない。参政権の獲得を目標に掲げ、それを達成した後、1920年代には収束に向かった第一波フェミニズムに対し、黒人公民権運動に触発されて1960年代なかばを中心に盛り上がりを見せた第二波フェミニズムは、社会制度的な男女間の不

〈表1〉 アメリカ大学総数および別学・共学の比率

年	大学総数	男子大学	女子大学	共学
1870年	582校	59%	12%	29%
1890年	1082校	37%	20%	43%
1910年	1083校	27%	15%	58%
1930年	1322校	15%	16%	69%
1957年	1326校	13%	13%	74%
1976年	1849校	4%	5%	91%
1981年	1928校	3%	5%	92%

Barbara M. Solomon, *In the Company of Educated Women: A History of Women and Higher Education in America*, (New Haven: Yale University Press, 1985), p.44 より作成

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

平等にアプローチしつつ、より私的な領域と考えられてきた、家族間や異性との関係性における権力構造や政治性を問題とした<sup>22)</sup>。そうした中で一般的にも広く「ジェンダー」という言葉が使われるようになり、その概念も理解されるようになっていく。同時代の女性解放運動、いわゆるウーマンリブ運動が進む中、身体的差異に基づく性別としてのセックスは変えられないが、セックスの上に築かれたとされる社会的性差であるジェンダーについてはより柔軟に変更が可能であるし、変更すべきであるというアプローチが広く浸透していった。男女は同一の性別を持たないが、社会的には同等になり得ると考えられたのである。

こうした前提の基では、「性差別撤廃」は「ジェンダーによる区別の撤廃」を意味していた。当時の女性運動は男子校として女性の受け入れを拒み続けてきた名門大学に共学化の要求をしていったが、その背景には「共学制こそが“進歩的”で“真正の”教育であるという暗黙の前提」が存在していた<sup>23)</sup>。伝統的に男子のみを受け入れてきた Ivy League の大学が共学化していく中で、女子大学もまた絶滅品種の「遅れた」存在とみなされていったのである。

このような時代、共学化の道を選んだヴァッサー以外の Seven Sisters は、どのような対応を取ったのだろうか。ヴァッサーの共学化決定後、ウェルズリー、マウント・ホリヨーク、スミスともに共学化を視野に入れた自己点検報告書を出している<sup>24)</sup>。こうした報告書のひとつ、スミス大学の“Smith College and the Question of Coeducation”では、別学がその使命を終えたのかどうかを検討する必要があることを認めた上で、多くの共学の中では女性が男性と同等の立場を与えられず、より低い立場に甘んじている状況が広く見受けられることを指摘している。そして、このような共学における男女間の力の不均衡さが、女子大学を共学化していく方向に導くかに見えた議論にブレーキをかけ、より慎重な判断を求めていると主張する<sup>25)</sup>。すでに実施していた、共学を含めた他の大学との提携や単位互換制度、海外留学プログラムや課外授業等のさらなる充実について提言した後、委員会は「アメリカの

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

大学生には幅広い教育の機会が提示されるべきだと考えており、その中でミスは女性たちに歴史的に共学である大学では得られない選択肢を提供し続けることができるし、すべき」であり、女子大学のままであるべきだと結論付けている<sup>26)</sup>。

60年代に始まる女性解放の時代、女子大学が危機の時代を迎えたことはだれの目にも明白だった。女子大学の人気は下がる中、ヴァッサーのように共学化することで生き残りを図る大学も多かった。その一方で、ミスのように、慎重に議論を重ね女子大学に留まる選択をした女子大学もあった。女性を受け入れる高等教育機関が増えたという意味では、すでに女子大学の社会的使命は終わっていたかもしれない。そのような中、女性のための高等教育機関として存続を続けようとした大学は、あらためて女子大学の意義と価値とを定義しなおす必要があった。女子大学でありつづける決定をした大学は、自分たちが共学に代わる選択肢を提供し、女性解放運動が是正をしつつあったとはいえ、いまだにジェンダー弱者の女性たちが安心して学べる環境を確保するという使命を再確認していったのである。

また、当時「時代錯誤」と揶揄された女子大学の多くが、第二波フェミニズムを担った人々を生み出してきたことも、ここで確認しておかなければならないだろう。ベティ・フリーダンやグロリア・スタインナムといった、第二波フェミニズムの立役者たちが、女子大学の出身であったことは見逃してはならない事実である<sup>27)</sup>。のちの第三波フェミニズム運動の中で批判されていくように、中産階級以上の白人の女性たちのエンパワーメントに偏向していたにせよ、女性だけの空間で、女性の関心に特化した教育を受けたがゆえに先鋭化した議論や思想、そしてアクティヴィズムが、以降の女性の、そして性的マイノリティーの運動に力を与え、次世代のリーダーシップを育てていった。

### 3. 女子大学の役割再考：第三の波

景気が低迷し、新保守主義の波が到来した1970年代後半から80年代にかけて、フェミニズムを推進させた時代の熱気は少しずつ収束していく。幅広い活動に広がった第二波フェミニズム運動をまとめる役割を担った、性の平等を憲法によって保障するための男女平等憲法修正条項、すなわちERA (Equal Rights Amendment) は1972年に連邦議会を通過したものの、期限までに必要な数の州での批准ができず、その10年後にあえなく不成立となった。その同年、*The New York Times* のスーザン・ボロティンは「ポスト・フェミニスト世代の声」という論説を発表している。ここで当時30代のボロティンは、自分よりも若い20代の女性たちの多くが、それまでの女性運動の功績を享受しつつも、あたかもそれが汚い言葉であるかのように「フェミニスト」と呼ばれることを拒否し、ジェンダーの不平等と闘ったり権利を主張したりすることをためらうようになってきていることを指摘している<sup>28)</sup>。かつては希望と可能性に満ちていたフェミニズムの意味合いがここ10年間で変わってしまった現状を受け、ボロティンはポスト・フェミニズムという言葉をここで初めて使っている。

このポスト・フェミニズムの時代、さまざまな論客が前世代の「いきすぎた」「過激な」フェミニズムをさまざまな角度から非難していくようになった。必ずしもそのすべての声が第二波フェミニズムの成果を否定するものではないが、フェミニストの学者たちが学問的に偏向しすぎている点や、女性を一面的に家長長制やジェンダー構造の犠牲者とみなす傾向などを攻撃していった。こうした論調は保守化する風潮と相まって力を持ち、80年代末には「フェミニズムは死んだ」とまで言われるようになる<sup>29)</sup>。しかし1990年代には、こうしたポスト・フェミニズムに対するリアクションとして、前世代のフェミニズムとの連続性を意識した第三波フェミニズムが始まったとされている<sup>30)</sup>。

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

第三波は、第一波のように参政権獲得のような大きな目標を掲げるわけではなく、第二波のように、社会を飲み込むほどの時代の熱気を世代の体験として共有しているわけでもない。その「思想や行動に一貫性を見出すことは難しい」し、「混沌とした感のある」この第三の波の意義を論じるのは、現時点では容易なことではない<sup>31)</sup>。フェミニズム運動の研究者である吉原令子によると、第三波フェミニズムの特徴は「多様性、包括性、非批判性」であり、アメリカ女性史研究の大家の有賀夏紀によれば「多様性と選択の自由」であるという<sup>32)</sup>。それまでのフェミニズムが無意識のうちに白人中産階級の異性愛者の女性たちの視点を中心としてきたことへの反省から、民族的、階級的、そして性的嗜好の点でさまざまな人々の声を取り入れようとしているという点で、第三の波は間違いなく多様性に価値を置いている。このように多様性を肯定的にとらえる傾向は、それまでのフェミニズムが所与のものとしてきた「女性」というジェンダーカテゴリーが決して一枚岩の本質ではなく、個人のアイデンティティと個々の選択によって定義づけられるものとする姿勢を生み出していった。本稿との関連で特に重要なのは、この第三波フェミニズムが出現するころから、再度女子大学の価値が見直される傾向がでてきた点、そしてこの新しいフェミニズム思想の特徴である、より多様な人々を受け入れようとする包括的な傾向が、2014年ごろから表面化していくトランスジェンダー学生の女子大への受け入れへの流れにつながっていくように見えるという点である。

1994年、*The New York Times* は全米の84校の女子大学の受験者が、3年前と比べて14パーセント増加し、女子大学在学学生数も1981年の82500人から、3年間で98000人に急増したことを報じている<sup>33)</sup>。この記事は、女子大学の人気の再燃の理由として、若い女性たちがセクシャル・ハラスメントの被害や、男性と異なる不利な扱いを受けるのを避けるために、よりリスクが高いと思われる共学を避ける傾向にあること、また時の大統領夫人にして、伝統的なファースト・レディの役割を超えて活躍するヒラリー・クリントンがウェルズリー大学出身だったという「ヒラリー効果」があると指摘

している。

この時代に女子大学の価値が見直された理由を、より詳しく見ていこう。同記事の中で、マウント・ホリヨークの学長のエリザベス・ケナン学長は、「共学という環境の中では、女性の教育の黄金時代はいまだに達成できていない」と述べ、70年代にはじまる Ivy League 等の伝統的な男子校の共学化の時代を経て、制度上は男女平等が達成されたかに見えても、いまだに男女に異なる役割を期待するステレオタイプは打破されていないことを指摘している。共学で学ぶ女子学生たちは、教員をはじめとする周囲の人々から、女性は理数系などの特定の学問分野に向いていないと示唆されたり、授業中に男子学生の発言の方が重んじられていると感じさせられたりといった、否定的な経験をすることがある。またクラブ活動の際も、男子学生の補助的な役割を期待され、女性が自らリーダーシップをとることは少なくなってしまう。こうした状況を考えると、第二波フェミニズムが達成した共学という場は、かならずしも男女に平等な学びの環境を提供するものではないと言わざるを得ない。その一方で女子大学に学ぶ学生たちは、共学に比べ高い比率を占める女性教員や、女性だけのクラスメートとかかわる中で積極的なロールモデルを見出し、自己肯定感を高め、自信をつけていくという教育効果が期待できるとこの記事は指摘する。

さらに同記事は、共学出身者の女性と比べた際、女子大学出身者の方が博士号取得者や政治・ビジネス界のリーダーとなっている割合が高い点を指摘したが、同様の傾向は20年を経た現在でも続いている。2014年にまとめられたデータでは、女子大学出身者は大学卒業生総数のわずか2%を占めるにすぎないが、アメリカの女性議員の20%を、ビジネス誌 *Fortune* の選ぶ全米上位1000社の女性役員<sup>34)</sup>の33%を占めている。

このように女子大学の意義が再評価されていく一方で、それが女子大学の経営の安定に直結していないこともまた事実である。リーマンショック以降、全般的に高等教育機関の経済難が続く中、その多くが小規模で郊外にあり、維持費も学費も高くなりがちな私立のリベラルアーツ・カレッジである

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

女子大学を取り巻く経済状況は特に厳しいと言える。それまでの中心的な顧客層だった白人中流上位層の絶対数が相対的に減っていく中で、多くの女子大学が共学化や合併による生き残りを図っているが、場合によっては廃校を余儀なくされるところも出てきている。先述の94年の*The New York Times*の記事では84校とされている女子大学は、その20年後の2014年の時点で46校にまで劇的に数を減らしている<sup>35)</sup>。女子大学の意義と利点は一般的に認識されているものの、経済的理由で志望校から外さなければならなかったり、他にも選択肢がある中で、あえて高額になりがちな女子大学に行くことに強い意義を見出さない若い女性たちが増えている。

しかしこうした中でも、ブランド力のある上位の女子大学は高い人気を維持しているし、全国的に有名とは言えない女子大学でも、より多様な学生を受け入れる努力をしている大学は安定した経営を続けている<sup>36)</sup>。例えばカトリック系の女子大学、トリニティ・ワシントン大学では、大学院での男子学生の受け入れの推進とともに、都市部の比較的低所得者層への広報に力を入れ、充実した奨学金や学生ローンを提供することで黒人やヒスパニック系といった、これまでとは異なる層の受験生の確保に努め、安定した学生数を集めている<sup>37)</sup>。性的マイノリティーに関する問題を扱うオンライン・マガジンの2014年の記事によると、各女子大学の階級的、人種・民族的に多様な学生の確保の努力の結果、全体で94%もの学生が何らかの形で奨学金を得て女子大学に入学してくるようになってきているという。またウェルズリーでは白人学生は半数以下になり、マウント・ホリヨークでは3人にひとりが有色人種である<sup>38)</sup>。現代の女子大学が、これまでのように白人中上流階級出身者だけではない、多様な女性たちをその潜在的な構成員とすることで全体の益としている構造が、第三波フェミニズムが目指す女性のエンパワーメントの手法と平行を描いている点に注目したい<sup>39)</sup>。

以上見てきたように、第二波フェミニズムの成果でもある共学という環境が、必ずしもすべての女性に好ましい学びの環境を提供するものではなかったことに、次世代の女性たちは気づいていく。女子大学の価値がふたたび見

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

直される一方で、時世の流れと経済不況の影響で、女子大学の数は近年ますます減ってきている。今後の女子大学は多様な女性を包括的に受け入れるという態度を明確にすることで、あえて女子大学に行くという現在では一般的ではなくなってしまう選択をする人たちの層を厚くしていく努力が必要となってこよう。女子大学の役割と社会的意義が、これまでも同時代のフェミニズム運動と連動して変化してきたことを考えれば、それは当然の結論のようにも見える。

#### 4. 「女子大学は誰のもの？」:

##### トランスジェンダー女性の受け入れをめぐる

先述のように、女子大学のトランスジェンダーの女性の受け入れをめぐる議論がマスコミで注目を集めだしたのは2013年前後のことだった。第4章ではこうした大学の中でも、特にスミス大学のケースを取り上げ、具体的に誰により何が議論されたのか、その議論の中で女子大学は何を確認したのかについて確認していく。

スミスのケースは、いささかドラマティックに始まった。2013年3月、女性としてのジェンダー自認を持つトランスジェンダーである高校生のカリオペ・ワンは、スミス大学から入学審査を拒否するという手紙を受け取った。その手紙には入試部部长名で、「スミスは女子大学であり (Smith is a women's college)」, 学部入学の場合、志願者は入学審査の時点で「女性でなければならない (must be female)」ので、ワンの審査は行えないと書かれていた。正式に出願する前からスミスの入試部と連絡を取り、説明と議論を重ねてきたワンは、この手紙の写真をブログで公開し、差別であると訴えた<sup>40)</sup>。

特にワンは、スミスが入学審査を拒否した根拠が、彼女が願書とともに提出をした、奨学金申請のための公的機関が発行した書類であったことを問題にしている<sup>41)</sup>。ワンが住むコネチカット州でも、スミスがあるマサチューセ

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

ッツ州においても、当事者が体の性と異なる性自認を持っていても、手術による性転換を行っていないければ出生証明書や公的機関の発行する書類には体の性が性別として記載されるので、この書類にはワンが「男性 (male)」であると書かれていた。その多くが10代の大学進学を志望する年代の少女たちが、高額な性転換手術を済ませている可能性は低く、「女性」と記載された公的書類を入学審査のためにそろえるのは事実上困難である。成績や志願書等の、本来大学が審査すべき書類に不備がないのに、こうした公的書類のために審査資格すら与えられないのは差別であると、ワンは主張した<sup>42)</sup>。性的多様性に対して寛容で、突出してリベラルだと考えられてきたスミスのような女子大学の許容性を非難したことで、ワンの主張はマスコミの注目を集めニュースとなり、スミス大学関係者および学生、同窓生をも巻き込んだ論争に発展する。スミス在学生によるトランスジェンダー支援団体 Smith Q & A の活動にも押され、2014年秋、大学は入学資格を見直すために、教員、学生、職員、同窓生から成る諮問委員会を招集することとなった。その際、大学は広く意見を募るために、多くの関係者に電子メールでメッセージを送っている。そこには、なぜ入学資格を見直す検討委員会を設立する必要があるのかが、以下のように述べられている。

スミスは1871年に男性が享受できたのと、質の面でも厳格さの面でも同じ教育を女性に提供するために設立されました。その使命は今日でも私たちの核となるものです。(中略) ジェンダーの概念が進化しつつある今、スミスは仲間たちと、女性であること、そして女子大学であることが何を意味するのかということ考察しています。このような問いは、「女性と男性 [female and male]」という(19世紀的な)二項対立的なジェンダー定義の文脈の中で設立された、われわれのような機関には特に重要な意味を持つものです。(中略) 最近、ミルズ大学、マウント・ホリヨーク大学、シモンズ大学が多様で幅広いジェンダー・アイデンティティを持つ学生たち [students with a range of gender identities] を受け入れるという、新しい入学資格を発表しました。私たちの大学もまた、教員、学生、職員、同窓生からなる、新しい入学基準を考えていく検討委員会を設立します。(後略)<sup>43)</sup>

女子大学が設立された19世紀の後半のアメリカ社会で「女性」というジェンダーが意味していた事と、今日の「女性」が意味することが異なると受け止めていることが、ここから見て取れるだろう。性別としての male/female の区分けが明確で、かつそれが多くの場合で men/women のジェンダーと一致すると考えられていた時代に設立され、女性の役割と社会とのかかわりを考え続けてきた女子大学が、「女性とは何か」について、自己認識を新たにする必要に迫られたのだ。1960年代に始まる第二波フェミニズムの議論は、それまで固定化されていると考えられてきたジェンダー役割が実は柔軟に変更が可能であるということを強調するあまり、その対比の中で性別としての male/female を逆に本質化してしまったきらいがある。しかしその性別こそ、ジェンダー・アイデンティティに即して変更が可能であるし、そうすべきであると主張する人々の声が大きくなってきた現在、今一度、誰が「女性」なのかについての考察を求める声が上がったのは、当然の流れであろう。そこで中心的な役割を担うのは、時代に即して、あるいは時の保守的な価値観に抗うかのように、女性の役割の再定義を繰り返し、その意味合いと活躍の場を拡大してきた女子大学の宿命のようにも見える。

キャスリン・マッカートニー学長が「スミスを支えるみなさんのすべての声や視点を盛り込めるように」と述べたように、この検討委員会は多くの関係者からの意見を募り、約半年の間議論を重ねた結果、トランスジェンダーの女性たちに入学資格を認めることを決定した<sup>44)</sup>。これを公式に発表する際、マッカートニー学長は「私たちが発表をした新しい入学基準は、その設立時の使命に忠実であり続けるとともに、変わりゆく世界を反映して進化し続ける、とある女子大学の立場を反映するもの」であると述べ、スミスの揺るぐことのない女子大としての使命を確認している<sup>45)</sup>。トランスジェンダーの女性たちを受け入れることは、決して共学化への第一歩ではない。むしろ女性というジェンダーに向き合ってきた女子大学としての歴史が強調され、その使命の一貫性が強調される一方、「女性」のアイデンティティや定義そのものに変化があったことが指摘されたのである。

## おわりに

2017年に、公には初めてとされるトランスジェンダー女性の卒業生が、マサチューセッツのシモンズ・カレッジ（Simmons College）で出るという<sup>46)</sup>。こうした話題がニュースで取り上げられるたびにその目新しさが強調されるが、その根底には女性とは何か、何が女性を女性という社会的存在にしているのかという、歴史的に女子大学が繰り返し問い続けてきた命題が存在している。女性が子供を産むという生殖能力に人格を規定され、教育を受ける権利を制限されていることに抗議してきた女子大学が、21世紀の今、生まれながらの性別、すなわち特定の生殖器の有無にこだわり、男性として生まれたトランス女性たちを疎外することは論理的にできないとバーナード大学の学生たちが主張したように、この問題はジェンダーと教育との関係の、歴史的な連続性の中で理解されるべきものである<sup>47)</sup>。

ここ2年ほどの間に多くの女子大学が発表したトランスジェンダーの女性学生を受け入れるという方向性は、こうした文脈の中では自然な結果だったとも言えるが、だれを「女性」とするかの定義に関しては、大学間で見解の相違がみられる。表2は、ジェンダーや階級の多様性理解のための啓蒙活動をしている団体が2015年にまとめた主要女子大学のトランスジェンダーの学生受け入れ方針の一覧である。トランス女性の受け入れそのものに関してはどの大学も「可」としているものの、だれが女性であるかという定義そのものについては、自己申告で良いところから、完全に性転換をしていないと女性と認めないところまで、大きな幅があることがここから分かるだろう。こうした違いこそが、現代のゆれうごくジェンダー定義の難しさを語るもののようにも見える。各大学が現在打ち出している女性であることの定義もまた、これまでの先人たちがそうしてきたように、再検討が繰り返されていくべきものなのであろう。

以上、女子大学とジェンダーの関係性を歴史的な文脈から見てきたが、女

女子大におけるジェンダーの多様性を理解する上で、トランス女子学生だけではなくトランス男子学生についてもここで付け加えておきたい。明確な人数や比率等の統計は管見の限り確認できないが、トランスジェンダーの女性受け入れ議論の始まるはるか前から、どこの女子大学にもトランスジェンダーの男子学生が一定数いるということは、女子大関係者の間ではよく知られていた。表2で示したように、多くの女子大学ではこれまでもトランス男性を入学させることはしていない。しかし女性として生まれ女子大学に入学し、その後に男性となった（あるいは女性であることをやめたり、男性に近づいたりした）学生に対しては、ほとんどの大学で転校を迫ることをしておらず、当事者たちの中には女子大学にとどまり続ける選択をする者が少なくない。多くの女子大学で、そのような男性の自己認識を持つトランスジェンダー男子学生を学内に抱えるようになってから、少なくとも10年はたっているという<sup>48)</sup>。例えばウェルズリーでは2014年の時点で、少なくとも24名程度の女性の自己認識を持たない学生がおり、その中の6名は明確に男性のアイデンティティを持っていた<sup>49)</sup>。全体で2300人程度の学生しかいないウェルズリーのような大学にとって、これらの学生の存在感は決して小さくはない。こうした既成事実として在学してきたトランス男子学生たちの存在が、女子大学でのジェンダーの多様性への理解を高め、トランス女性を受け入れやすくした面もあるだろう。

このように、ジェンダー・アイデンティティとして幅がある人々が、なぜあえて女子大学で学ぼうとするのだろうか。第一章で見たように、女子大学の多くは、階層的には恵まれていたとしても、ジェンダーを理由に学ぶことを否定された女性たちのために設立されている。時代の流れの中で、その存在感も存在意義も変化してきたものの、現在残っている女子大学について言えば、ジェンダー弱者のための教育をその使命とし続けてきたという点で一貫している。性的ハラスメントを受ける可能性が低いという期待から女子大学を選ぶ学生もいることから、女子大学がこうした人々にとってより安心して教育を受けられる場所であると認識されていることがわかるだろう。ト

〈表2〉 主要女子大学のトランスジェンダー学生受け入れ状況

大学名	方針決定時期	トランス女性入学可否	女性ジェンダーの確認方法	トランス男性入学可否	入学後にトランスした男性が在学し続けることの可否
バーナード	2015年6月	可	未決定	否	可
スミス	2015年5月	可	自己認識：大学共通願書で「女性」を選択していること	否	可
ウェルズリー	2015年3月	可	未決定	否	可
プリン・マー	2015年2月	可	自己認識：追加情報が必要とする場合もある	一部可：男性化のための医療・法的手段をとっていなければ	可
マウント・ホリヨーク	2014年夏	可	自己認識	可	可
ミルズ	2014年5月	可	自己認識：出願者は入学課に証明できる情報を提供しなければならぬ	一部可：男性化への法的手段を取っていないければ	可
ホリンズ	2007年	可	トランス女性性は性転換手術を済ませ、法的にも女性となっていること	否	可：ホルモン治療、手術、または名前の変更を伴う性別転換をするまでならば

Think Again Training, "Comparison of Women's Colleges' Policies on Transgender Students," handout issued on 25 June, 2015 より一部訳出。〈<http://www.ncgs.org/Pdfs/Transgender/WomensColleges/ComparisonPoliciesTransgenderStudents.pdf>〉, last accessed 2016/09/19.

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）  
ランス女性にとってもトランス男性にとっても、そして綿々と続いてきたフェミニズムの成果を享受しつつも、折に触れいまだに性差別を意識せざるを得ないシスジェンダーの女性たちにとっても、女子大学がジェンダー弱者のエンパワーメントの場であるからこそ、ここを学び舎として選ぶ人々が常に一定数存在しているのだ<sup>50)</sup>。

最後に、トランスジェンダーの人々の入学資格をめぐるアメリカの女子大学での議論は、アメリカと同様に女子大学の存在感の大きい日本の高等教育界にも数々の示唆を与えるものであることを指摘し、本稿を終えたい<sup>51)</sup>。日本社会は、アメリカの女性運動、特に第二波フェミニズムの影響を強く受けつつも、一般的には人々のジェンダーの多様性への理解や感受性は表層的なものにとどまっていると言わざるを得ない。日本ではジェンダーに関する議論が、いまだに現実的には男性を主体とした主流社会の中での「女の問題」として例外視される傾向にあり、いわゆる「おネエ」タレントがもてはやされ、巷にあふれる性的な記号は薄笑いをもって容認されていても、性とそのあり方を、人の生き方という根源的な問題としては語りにくい風潮がある。トランスジェンダーの人々をめぐる問いは、それ以外の人々を含めた社会全体のありかたをめぐる問いでもあることは、本稿で考察した通りである。日本においても、トランスジェンダーの概念の理解がすすみ、また現実にかうした人々の存在が可視化されていく中で、硬直化したジェンダー観に修正を迫るようになるだろう。

## 註

- 1) An e-mail from Kathleen McCartney and Elizabeth Eveillard to students, faculty, staff, parents and alumnae, “Smith College Admission Policy Announcement,” May 1, 2015. McCartney はスミス大学学長、Eveillard は同大学教育委員会委員長としてこの声明を連名で出している。同じ内容の声明は、スミス大学 HP でも公開されている。“Admission Policy Announcement,” Smith College 公式 HP 〈<http://www.smith.edu/studygroup/>〉, last accessed 2016/02/24. 筆者はスミス大学の同窓生としてこのメールを受け取っている。スミス大学からのメールについては、以下同じ。なおメールの内容については、同校のキャスリン・マッカートニー学長からの許可を受

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方（砂田）

け、本論文に引用した。

- 2) 後述するようにヴァッサー大学は1969年に共学化しているが、小規模リベラルアーツ伝統校の使命や関心は変わらないとして、Seven Sistersの一員として他校と変わらぬ関係を保っている。Vassar College, <<https://vcencyclopedia.vassar.edu/notable-events/the-seven-sisters.html>>, last accessed 2016/03/24. またラドクリフは1999年にハーヴァードと完全に合併しており、現在では独立した大学ではなくなっている。
- 3) 2015年から、こうした既存の性別を拒否する人たちを呼ぶ際、「Mr.」「Ms.」に代わり使われる敬称である「Mx.」が、Oxford Dictionary of Englishに新しく加えられた。<<http://www.oxforddictionaries.com/definition/english/mx>>, last accessed 2015/09/02.
- 4) 厳密には元来、transgenderは異性装や立ち居振る舞いにより性を超越する事を指し、手術やホルモン治療を受けた性転換はtranssexと呼び区別していたが、現在では後者を含めて前者の用語を使用することが一般的である。1990年代ごろから、以前と比べれば性転換医療が受けやすい条件が整ったことで、transsexの特殊性が薄れていったことと関係していると思われる。Transgenderが包括的用語であるということは、当然ながらトランスジェンダーの人々の間に幅広い多様性があるという事を意味し、コミュニティ内でも「誰が真のトランスジェンダーなのか」という問いが繰り返され、時に確執を生むこともある。こうした問題については、別稿で考察したい。
- 5) GLAAD official website <<http://www.glaad.org/reference/transgender>>, last accessed 2016/03/19.
- 6) ホーン川嶋は、こうした例外としてペンシルヴァニアのモラヴィア人植民地における女子教育を挙げている。ここでは女子のための寄宿学校が作られ、「語学、文学、宗教、歴史、音楽から、天文学、生物学、物理学まで」、伝統的に男子のみの学問とされた分野まで教えた。ホーン川嶋瑤子『大学教育とジェンダー：ジェンダーはアメリカの大学をどう変革したか』（東信堂、2004年）、5頁。
- 7) 「共和国の母」概念については、以下が古典的研究として知られている。Linda Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America*, (University of North Carolina Press, 1980); 有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』（勁草書房、1988年）。
- 8) これらの女子大学設立の経緯については、坂本辰朗、『アメリカの女性大学：危機の構造』（東信堂、1999年）、10-15頁；村田鈴子『アメリカ女子高等教育史——その成立と発展』（春風社、2001年）、59-76頁。連携大学は、母体の男性大学とは別に独自のキャンパスや校舎を持つ女子大学であるが、その学生は男性大学の教員を招いて授業を受けたり、男性大学の図書館を利用したりすることができる。坂本は「共学には反対するが女性の高等教育への要求にはある程度の配慮をするという、妥協の産物」と呼び、村田は「共学大学と女子大学とが妥協した形であって、共学の一変種とみなされている」と述べる。坂本、『アメリカの女性大学』、14

頁；村田，73頁。なお，ここに記した開校年は，学生を受け入れた年を基準としている。

- 9) 農業や工学教育を念頭に置いた教育機関設立のために，合計で11367832エーカーの土地を連邦政府が各州に払い下げることを決めたモリル法が1862年に成立し，その結果として州立大学が急増することとなったが，そこでは男女に教育の機会が均等に開かれることが前提となっていた。したがって，西部地域に多く新設されたモリル法の恩恵をこうむった州立大学では，「両性に等しく」門戸を開くこととなった。坂本辰朗「アメリカ高等教育における男女共学制の発展：19世紀を中心に」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学』17号，1977年，61頁。ただし，私立，州立を問わず制度上女性の学生を受け入れている大学に入学しても，履修科目に制限が課されたり，教室や寮で男性学生と同等の扱いを受けられなかったり等，女性学生は例外視されることが多々あった。こうした背景を考えると，良い環境で真剣に学びたい当時の若い女性たちにとって，女子大学が大きなオプションであったことが分かるだろう。19世紀の共学における女子学生の扱いについては，坂本，『アメリカの女性大学』，8-9頁；村田，54-59頁。
- 10) 坂本辰朗，『アメリカ大学史とジェンダー』（東信堂，2002年），91頁。
- 11) Margaret A. Lowe, *Looking Good: College Women and Body Image, 1875-1930*, (Baltimore: The John Hopkins University Press, 2003), 1-2；坂本，『アメリカ大学史とジェンダー』，111-125頁。
- 12) 坂本辰朗，『アメリカ教育史の中の女性たち』（東信堂，2002年），76頁。
- 13) 健康だったMiss Dは14歳でヴァッサーに入学し，特に優秀ではなかったが，通常の教科でも体育でも，きちんと授業を受ける真面目な学生だった。しかし学年を追うにつれ，たびたび気を失うようになり，また生理痛が酷くなり，次第に無月経症となりヒステリーや慢性の頭痛に悩まされるようになってしまった。Edward Hammond Clarke, *Sex in Education; or, A Fair Chance for Girls*, Kindle Edition, 45-48.
- 14) Lowe, 24-25.
- 15) Ibid, 25.
- 16) Ibid., 20-21.
- 17) Mabel Newcomer, *A Century of Higher Education for American Women*, (New York: Harper & Brothers Publishers, 1959), 49. ニューカマーはヴァッサーで40年間経済学を教え，退職したのちヴァッサー開校100周年を記念してこの本を書いている。
- 18) “How the Seven Sisters Colleges Became the Women’s Lives,” NICHE, (<https://ink.niche.com/seven-sisters-colleges/>), last accessed 2016/03/24.
- 19) 坂本，『アメリカの女性大学』，20頁。
- 20) “Colleges: Better Coed than Dead,” *The Time Magazine*, May 05, 1967. *The Time Magazine Online*. (<http://content.time.com/time/magazine/article/0,9171,899503,00.html>), last accessed 2016/03/22.

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方 (砂田)

- 21) Elaine Kendall, *"Peculiar Institutions": An Informal History of the Seven Sisters Colleges*, (New York: G. P. Putnam's Sons, 1975), 257. 南部奴隷制度についての同名の著作は, Kenneth M. Stampp, *The Peculiar Institutions: Slavery in the Ante-Bellum South*, (New York: Vintage Books, 1956).
- 22) ここでは省くが, 第二波フェミニズムにもさまざまな運動があり, 当然ながらそれぞれの活動団体によってさまざまなアプローチがあった。より詳しい運動史については, 吉原令子, 『アメリカの第二波フェミニズム: 一九六〇年代から現在まで』(ドメス出版, 2013年)を参照。
- 23) 坂本, 『アメリカの女性大学』, 27頁。
- 24) 前掲書, 20頁。
- 25) "Smith College and the Question of Coeducation," Smith College, April 1971, 4. <<http://clio.fivecolleges.edu/smith/coed/ff11/19710400/index.shtml>>, last accessed 2016/03/25.
- 26) Ibid., 19.
- 27) Betty Friedan は1963年, 第二波フェミニズムが始まるきっかけとなる『新しい女の創造』(*The Feminine Mystique*)を著し, のちに全米女性機構(NOW: National Organization for Women)の結成の中心人物となる。フリーダンのスミス大学での活動がいかにのちの著作の執筆につながったかについては, Daniel Horowitz, *Betty Friedan and the Making of the Feminine Mystique: the American Left, the Cold War, and Modern Feminism* (University of Massachusetts Press, 1998). Gloria Steinem は文筆家, 活動家として知られ, 1972年, フェミニスト雑誌の『ミス』(*Ms.*)を創刊させた。フリーダンは1942年の, スタイナムは1956年のスミス大学の卒業生である。
- 28) Susan Bolotin, "Voices from the Post-Feminist Generation," *The New York Times*, October 17, 1982. <<http://www.nytimes.com/1982/10/17/magazine/voices-from-the-post-feminist-generation.html?pagewanted=all>>, last accessed 2016/03/29.
- 29) "Is Feminism Dead?," *Time Magazine*, June 29, 1989.
- 30) 第三波フェミニズムという言葉は, 作家のアリス・ウォーカーの娘であるレベッカ・ウォーカーが1992年に書いたエッセイで使われたのが初めてであったという。有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』(青木書店, 2010年), 310頁。原文は, Rebecca Walker "Becoming the Third Wave," *Ms. Magazine* (Jan./Feb., 1992): 39-41. ウォーカーは, "I am not a postfeminism feminist. I am the Third Wave." という文でこのエッセイを締めくくり, ポスト・フェミニズムからは距離を置き, 第二波フェミニズムとの連続性を強調している。本エッセイは以下で読むことができる。<<http://www.msomagazine.com/spring2002/BecomingThirdWaveRebeccaWalker.pdf>>, last accessed 2016/03/29.
- 31) 有賀・小檜山, 310-311頁。
- 32) 吉原, 213頁。有賀・小檜山, 311頁。新しい世代のフェミニストたちは, フェミニズムの必要性を十分に理解しつつも, それが内包しがちな「イデオロギー偏重主

義、二者択一的な思考、閉鎖的な雰囲気」には批判的で、「個人がさまざまな思想的立場を自由に選択し、相反する立場を許容しようとする。社会全体の改革を目指すような運動ではなく、ファッションや音楽といったサブカルチャーと結びつき、インターネットやミニコミ誌などの新しい形で自分たちの身近なニーズと関心に合ったメッセージを、比較的小さいグループとして発信しようとしている点も、それまでのフェミニズムのありかたとは一線を画していると言えよう。吉原、212-221頁。

- 33) Maria Newman, "Women's College Find a New Popularity," *The New York Times*, January 15, 1994. <<http://www.nytimes.com/1994/01/15/us/women-s-colleges-find-a-new-popularity.html?pagewanted=all>>, last accessed 2016/03/30. ここに挙げられた数字は、ワシントンにある Women's College Coalition の集計したデータによる。
- 34) Ssara Kratzok and Casey Near, "Why a Women's College?" report published by Collegewise, Second edition, February 2014, 19. <[http://www.womenscolleges.org/sites/default/files/report/files/main/why\\_a\\_womens\\_college\\_ebook.pdf](http://www.womenscolleges.org/sites/default/files/report/files/main/why_a_womens_college_ebook.pdf)>, last accessed 2016/04/01.
- 35) Women's College Coalition, "The Truth about Women's Colleges: Comparative Enrollment Trends of Women's Colleges and Private, Coeducational Colleges," report, June 2014, 1.
- 36) スミス大学のキャスリン・マッカートニー学長は、朝日新聞のインタビューに答え、多くの女子大学が共学に変わってきたのは事実だと認めた上で、スミスの志願者が9年連続で増え続けていることを挙げ、上位の女子大学の人気は根強いままで、人気が高まっている女子大学もあることを指摘している。「女子大学は必要なのか？ 女性の人生への『介入』に意義」朝日新聞Globe, 2016年2月21日, G-10。
- 37) "Sweet Briar College to Close because of Financial Challenges," *The Washington Post*, March 3, 2015. <<https://www.washingtonpost.com/news/grade-point/wp/2015/03/03/sweet-briar-college-to-close-because-of-financial-challenges/>>, last accessed 2016/04/01.
- 38) Kat Callahan, "Trans Women Offer Women's Colleges a New Way to Support an Old Mission," RoyGBIV, Jezebel. <<http://roygbiv.jezebel.com/trans-women-offer-womens-colleges-a-new-way-to-support-1629386197>>, last accessed 2016/07/03.
- 39) その一方で、白人中産階級層出身者は、逆に女子大学進学が難しくなっている。*The New York Times* に宛てた手紙の中で、ある父親は、自分の娘が数々の有名女子大に受かったものの、年間25000ドルの学費（寮費は別であろう）を払うことは、バイトをしながらやりくりしている公務員の自分には難しいと訴えている。そして、こうした高額な女子大学はもはや、「(奨学金を必要としない)金持ちか、(奨学金をもらえる)低所得者か崩壊した家庭出身者かマイノリティーのためのものになってしまっており、(自分の娘のような)両親がそろった白人の中流家庭出身者はお断りというわけだ」と、娘を志望校に送れなかった失望と怒りを露わにし

フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方 (砂田)

- ている。“Minorities and Adult Education Give Women’s Colleges a Boost; Not for Middle Class,” *The New York Times*, January 30 1994. <http://www.nytimes.com/1994/01/30/opinion/1-minorities-adult-education-give-women-s-colleges-boost-not-for-middle-class-033502.html>, last accessed 2016/04/04.
- 40) Calliope Wong, “Thank you.,” in *Trans Women @ Smith*, blog entry, March 10, 2013. <http://calliowong.tumblr.com/post/45074030481/thank-you>, last accessed 2016/04/03.
- 41) Ibid. ワンは 2015 年 1 月 6 日の MSNBC の以下のインタビューでも同様の主張を行っている。 <http://www.msnbc.com/ronan-farrow/watch/top-schools-transgender-injustice-380728387736>, last accessed 2016/04/04.
- 42) Calliope Wong, “Make Smith Possible for Trans Women,” in *Trans Women @ Smith*, blog entry, August 15, 2012. <http://calliowong.tumblr.com/post/29467307825/make-smith-possible-for-trans-women>, last accessed 2016/04/03.
- 43) An e-mail from Kathleen McCartney (President) and Elizabeth Eveillard (Chair, Board of Trustees) to Erika Sunada, “A Message from President Kathleen McCartney,” November 7, 2014. 卒業生を含めた大学関係者から広く意見を募るため、メール内では宛先の個人名での呼びかけがなされている。( ) 内は筆者による注釈。[ ] 内は原文。
- 44) “Gender and Admission: College to Review its Policies in the Light of Evolving Conversation about Identity,” *Smith Alumnae Quarterly*, winter 2014–2015, vol. 101, no. 2, 17.
- 45) An e-mail from Kathleen McCartney (President) and Elizabeth Eveillard (Chair, Board of Trustees) to Students, Faculty, Staff, Parents and Alumnae, “Smith College Admission Policy Accouchement,” May 2, 2015.
- 46) Callahan, “Trans Women Offer Women’s Colleges a New Way to Support an Old Mission,” last accessed 2016/07/03.
- 47) Luna Adler, “She/her/hers,” on videmo, <https://vimeo.com/129056716>, last accessed, 2016/09/10.
- 48) Ibid.
- 49) Ruth Padawer, “When Women Became Men at Wellesley,” *The New York Times*, Oct. 15, 2014. [http://www.nytimes.com/2014/10/19/magazine/when-women-become-men-at-wellesley-college.html?\\_r=0](http://www.nytimes.com/2014/10/19/magazine/when-women-become-men-at-wellesley-college.html?_r=0), last accessed, 2016/07/07.
- 50) シスジェンダー (cisgender) は、生まれたときの性別と性の自己認識が一致している人々、つまりトランスジェンダーではない人々のことを指す。暗黙のうちに、トランスジェンダーを異常、それ以外を正常とすることを避けるために使われるようになった。
- 51) 2017 年 3 月、日本女子大学が 2017 年度より、男性の体で生まれたが、女性として生きるトランスジェンダーを学生として受け入れるかどうかの検討を始める事が、日本でも広く報じられた。